Static bone cavity の1例

芳賀信義・村田晴康・広瀬恒久・松井恭史
河合 幹

Static bone cavity: report of a case

Nobuyoshi HAGA・Haruhiko MURATA・Tsunehisa HIROSE
Kyoshi MATSUI・Tsuyoshi KAWAI

緒 言 症 例

臨床的に無症状に経過し、歯牙には関係なく、全身的にも直接関係する疾患も見あらず、下顎角附近に円形または橢円形の拇指頭大位のX線像上一見嚢胞を思わせるような骨腔を、1942年、Stafne が初めて発表した。以来このような骨腔は Latent bone cyst, Static bone cavity, Idiopathic bone cavity, Developmental defect などと呼ばれており、骨腔内には通常嚢胞壁は存在せず、真の嚢胞とは呼びがたいとされている。本症の成因については諸説があるが、いずれもほとんど無症状に経過すること、発表例が極めて少ないことなどから、いまだ定説が確立されるには至っていない。

私達は、X線像により偶然発見された左下顎角部の Static bone cavity と思われる症例に遭遇したので報告する。

患者： 58歳 男性
初診：昭和46年7月
主訴：左上頬部および側頭部の疼痛 (Static bone cavity は偶然発見されたもので、主訴とは関係ない)
既往歴：特記すべき事項なし
現症歴：来院4～5日前より左上頬部および側頭部の疼痛と難聴をきたし、歯牙疾患を疑い当科へ来院した。

現 症

全身所見：体格栄養中等度、両側性聴力障害 (難聴)。両眼視野狭窄などがみられたが、某大学医学部脳外科で診察を受けた結果、頭蓋内脳血管障害の疑いと診断された。臨床検査所見は表1のごとくで異常は認められな

表 1

血 液 一 般 検 査		血 液 生 化 学 検 査	
RBC	549×10/mm ³	TP	6.4% g
WBC	4700/mm ³	Alb	3.4 g %
Hb	100% (16.0 g dI)	Glb	3.0 g %
Ht	46%	A/G	11.5
白血球百分率		GOT	21.0単位
Stab	7%	GPT	32.0単位
Seg II	26%	TTT	4.0単位
Seg III	22%	ZTT	8.4単位
Seg IV	1%	総ビリルビン	0.72 mg/dI
Lympho (S)	39%	直接ビリルビン	0.12 mg/dI
(L)	3%	間接ビリルビン	0.60 mg/dI
Mo	2%	Al-P	7.3
		Chop	1.07

愛知学院大学歯学部第2口腔外科学教室 (主任：河合 幹教授)
Second Department of Oro-Maxillo-facial Surgery, School of Dentistry, Aichi Gakuin University (Chief: Prof. Tsuyoshi Kawai)
受付日：昭和52年2月5日

写真 1

写真 4

写真 5

写真 2

写真 3

局所所見：顔面は左右対称で外観上異常を認めない。
 触診により顎下リンパ節を触れない。口腔内所見は
 7654|67に金属冠が装着され、|57にインレー、|8にア
 765|6

マルガム充填が施されている。口腔粘膜および歯周組織には異常所見を認めない。

X線所見：左下顎角部やや前方に拇指頭大、楕円形の境界明瞭な小単胞性の嚢胞様の透過像が発見された。後頭前頭位撮影では、下顎角部の顎嚢胞を思わせる所見を呈したが(写真1)、斜位、オルソパントモグラフでは下顎角やや前方の顎骨下縁に存在する骨凹窩を思わせる所見を呈した(写真2, 3)。|567には、充填、金属冠、根管充填などを認めるが、根尖部には全く異常を認めず、骨腔との間には距離があり、凹窩に関係があるようには見られない。

臨床診断：主訴の左側頭部痛は前記したように頭蓋内脳血管障害と診断され、口腔と全く関連のないことが判明したが、偶然に発見された下顎角部のX線所見に関しては、Static bone cavity と診断した。

処置および経過：某大学脳外科で、脳血拴の診断のもとに約半月程入院、退院後比較的良好な経過をとったため、初診時より約2ヵ月後、当科入院の上、局所麻酔下にて下顎下縁に皮切を行い下顎下縁を露出させたところ、下顎下縁より舌側にかけて拇指頭大の骨凹窩を認め、同部に口腔底軟組織の一部が陥入しているのを認めた。

陥入組織の口腔底組織との連結部を切離し、骨凹窩より摘出した。凹窩骨面は滑沢で正常骨面の外観を呈していた。術後は良好な経過をとり、術後約6年近く経過した現在に至るも再発などの異常は認められない。

病理組織診断：凹窩陥入組織の組織学的所見は、写真4, 5に見られるように正常リンパ節組織であり、リンパ節組織の陥入による Static bone cavity と診断した。

考 察

1942年 Stafne²¹⁾ は、X線像で下顎角部に円形または橢円形の拇指頭大の境界明瞭な囊胞を思わせるような骨腔を有する疾患について初めて発表した。この骨腔は歯牙や全身的な疾患とは直接的な関係がなく、偶然X線像により発見されることが多く、臨床的には無症状で長期にわたり変化せず、一般的には発育増殖しないとされている。骨腔の内容は、通常上皮や内容液はなく唾液腺組織、リンパ節組織、線維組織、脂肪組織等が陥入していると発表されており、真の囊胞とは言いがたい。

Stafne 以来、Latent bone cyst, Static bone cavity, Idiopathic bone cavity, Developmental bone defect 等と呼ばれ、海外では比較的報告例が見られるが、本邦ではわずかに数例の報告が見られるのみである。本邦での報告は1965年西嶋ら²²⁾が、Latent bone cyst として学会報告したものが最初で、千野ら⁶⁾、伊藤ら^{14, 15)}、菅原ら³²⁾、本例¹⁰⁾などの学会報告が続き、それぞれ改めて論文として発表されている^{7, 16, 23)}。

名称については、本例も1973年の発表時¹⁰⁾には本邦初発表の西嶋ら^{22, 23)}に敬意を表して Latent bone cyst の名称を用いたが、後述する成因本態からみて囊胞の名称は妥当でなく、後三者の名称を使用すべきであろう。外国文献および本邦の報告を検討すると、性別的には圧倒的に男性に多く、年齢的には高齢者に多い事実がみられるが、その理由は不明で、本例も58歳の男性であった。本症は自覚症状が全く無く、他の疾患を訴えて来院し偶然にX線診査で見出されることが多いので、発見が遅れるということもその理由の一つであろう。

発生部位は、大部分が下顎角やや前方の下顎下縁近くに位置しているが^{1-4, 8, 9, 11, 14, 15, 19, 20, 23, 26, 27, 29-32, 34, 35)}、下顎正中部²¹⁾、犬歯部附近^{7, 25, 28)}の例もみられる。X線所見では橢円形単胞性囊胞様像として報告されているものが多い。本例も前頭後頭位撮影ではそのような所見を呈しているが(写真1)、斜位撮影、オルソパントモグラフでは囊胞というよりは、下顎下縁近くの凹窩と推定される所見を呈しており(写真2, 3)、この所見は伊藤ら¹⁵⁾の報告の第I, II症例、および西嶋ら²³⁾、その他の^{1-4, 8, 9, 11, 19, 26, 27, 29-31, 34, 35)}論文掲載写真に同様所見がみられる。凹窩内容物については唾液腺^{1, 4, 7, 8, 11, 19-21, 23, 25, 26, 28, 30-32)}、リンパ節組織²⁾、線維性結合組織^{2, 15, 24, 35)}

空虚^{2, 3)}等種々の報告をみるが、本例では正常リンパ節組織が陥入しており、窩内骨面は外観上正常で滑沢であった。

成因については、胎生期の Condylar cartilage が下顎角部に残遺して同部の骨膜よりの骨添加が妨げられるとする軟骨残遺説³¹⁾、隣接軟組織(唾液腺、リンパ節、線維性結合組織)の一部が顎骨形成期に骨内にとり込まれることにより生ずるとする組織陥入説^{17, 30)}、骨囊胞の残遺物があるとの説²⁹⁾、外傷に起因するとの説などがみられる。軟骨残遺説は本症の大部分が下顎角部に発生することの説明を十分にしないことから説得力乏しく、また囊胞残遺説は組織像から全く容認し得ない。外傷説は本症の大部分が外傷の既往を有しないことから否定される。これに対し隣接軟組織の陥入説は、内容物に対する説明、凹窩形成に対する説明、発生部位に対する説明なども十分に納得でき、伊藤ら¹⁵⁾、西嶋ら²³⁾、菅原ら³²⁾、千野ら⁷⁾、本例などの報告で、下顎の舌側において口腔底軟組織と骨凹窩内組織とが連続移行していると発表されており、凹窩が閉鎖腔ではなくて、外部に連通していることなどもこれを裏づけるように思われ、著者はこの説に賛同するものである。ただこの説に対する疑問として、本症がなぜ若年者に発見されないかという問題だけが残されており、今後若年者のX線写真を数枚あるごとに検索することが望まれる。このような意味から本症のX線所見は長期にわたり変化せず、本症は発育または増殖しないと考えられるが、一部には発育するとの報告³⁶⁾もみられ、今後の問題を残している。

治療については、成因からみて本症であるとの診断がつけば手術の必要はない。Stafne²¹⁾も数例につき手術をしないで5~11年間の経過をみて変化がなかったと報告し、伊藤ら¹⁵⁾の第1例も手術はされておらず、千野ら⁷⁾も手術の必要ないと説明している。手術は確定診断の意味においてのみ意義が認められるであろう。

経過についてはいずれの報告でも良好で、本例も術後6年近く経た現在も良好な経過を得ている。

結 語

1) Static bone cavity と思われる症例に遭遇したので、若干の文献的考察を加えて報告した。

2) 患者は58歳の男性で、偶然X線により左下顎角部やや前方の下縁に、拇指頭大の橢円形の透過像として発見された。

3) 前頭後頭位撮影では、一見囊胞様所見を呈したが、斜位撮影、オルソパントモグラフでは下顎下縁近くの凹窩と認められる所見を呈していた。

4) 骨腔内にはリンパ節組織が陥入しており、Static bone cavity と診断した。

5) この症例は、X線で見られるまで臨床的に無症

に経過し、外傷やそれを誘引するような既往歴もな
 い、胎生期にリンパ組織が陥入することにより、先天的
 発生したものとして推定した。

6) 術後経過は良好で、6年近く経過した現在に至る
 で、再発などの異常を認めていない。

本論文の要旨は、昭和48年9月、第18回日本口腔外科
 会総会において発表した¹⁰⁾。

文 献

- 1) Amaral, W.J. et al.: Aberrant salivary gland defect in the mandible, OS OM OP, 14 : 748, 1961.
- 2) Bergenholtz, A., et al.: Idiopathic bone cavities: A report on four cases, OS OM OP, 16 : 703, 1963.
- 3) Bernstein, H.F. et al.: Static bone cavities of the mandible: review of the literature and report of case, J Oral Surg, 16 : 46, 1958.
- 4) Boerger, W.G., et al.: Idiopathic bone cavities of the mandible: a review of the literature and report of case, J Oral Surg, 30 : 506, 1972.
- 5) Camilleri, G.: Salivary gland inclusion in the mandible, British D J, 114 : 515, 1963.
- 6) 千野武広, 他 : Stafne's idiopathic bone cavity の 1 症例, 日口外誌, 14 : 198, 1967.
- 7) 千野武広, 他 : Stafne's idiopathic bone cavity の 1 症例, 日口外誌, 15 : 124, 1968.
- 8) Choukas, N.C., et al.: Etiology of static bone defects of the mandible, J Oral Surg, 18 : 16, 1960.
- 9) Fontaine, J.N. et al.: Cavite statique mandibulaire, J canad DA, 32 : 141, 1966.
- 10) 芳賀信義, 他 : リンパ節組織陥入により Latent bone cyst の 1 症例, 日口外誌, 19 : 714, 1973.
- 11) Hayes, H.: Aberrant submaxillary gland tissue presenting as a cyst of the jaw, OS OM OP, 14 : 313, 1961.
- 12) Hirschler, W.J., et al.: Aberrant gland in tonsillar fossa, Arch Otolaryng, 34 : 174, 1941.
- 13) 石川梧郎, 他 : 口腔病理学 II, 永末書店, 京都, 1969, 858頁.
- 14) 伊藤輝夫, 他 : Static bone defect について, 日口外誌, 17 : 272, 1971.
- 15) 伊藤輝夫, 他 : Static bone defect の臨床病理学的考察, 口科誌, 21 : 407, 1972.
- 16) 伊藤輝夫, 他 : 下顎限局性骨欠損および骨腔の臨床病態と、その成因に関する考察, 口科誌, 23 : 441, 1974.
- 17) Jacobs, M.H.: Traumatic bone cyst, OS OM OP, 8 : 940, 1955.
- 18) Jaffe, H.L., et al.: Solitary unicameral bone cyst with emphasis of the roentgen picture the pathologic appearance and the pathogenesis, Arch Surg, 44 : 1004, 1942.
- 19) Karmiol, M., et al.: Incidence of static bone defect of the mandible, OS OM OP, 26 : 225, 1968.
- 20) Mack, L.M., et al.: Static bone defect of the mandible, J Oral Surg, 27 : 262, 1969.
- 21) Miller, A.S., et al.: Salivary gland inclusion in the anterior mandible, Oral Surg, 31 : 790, 1971.
- 22) 西嶋克己, 他 : いわゆる Latent bone cyst の 1 例, 日口外誌, 11 : 25, 1965.
- 23) 西嶋克己, 他 : いわゆる Latent bone cyst の 1 例, 日口外誌, 15 : 69, 1969.
- 24) Olech, E., et al.: Lingual mandibular bone cavity, OS OM OP, 14 : 1360, 1961.
- 25) Palladino, V.S., et al.: Salivary gland tissue in the mandible and Stafne's mandibular 'cyst', JADA, 70 : 388, 1965.
- 26) Penhale, K.W.: Cysts of the maxilla and mandible: diagnosis and treatment, J Oral Surg, 1 : 138, 1943.
- 27) Peterson, L.W.: Cystic cavity in the mandible: Report of a case, J Oral Surg, 2 : 182, 1944.
- 28) Richard, E.L., et al.: Aberrant salivary gland tissue in mandible, OS OM OP, 10 : 1086, 1957.
- 29) Rushton, M.A., et al.: Solitary bone cyst in the mandible, Brit Dent J, 81 : 37, 1946.
- 30) Seward, G.R.: Salivary gland inclusions in the mandible, Brit D.J, 108 : 321, 1960.
- 31) Stafne, E.C.: Bone cavities situated near the angle of the mandible, JADA, 29 : 1969, 1942.
- 32) 菅原利夫, 他 : Developmental defect of mandible containing salivary gland tissue (Stafne) の 1 例について, 口科誌, 21 : 406, 1972.
- 33) Taylor, G.D., et al.: Salivary gland tissue in the middle ear, Arch Otolaryng, 73 : 651, 1961.
- 34) Thoma, K.H.: Case report of a so-called latent bone cyst, OS OM OP, 8 : 963, 1955.
- 35) Tolman, D.E., et al.: Developmental bone defects of the mandible, OS OM OP, 24 : 488, 1967.